
TimeTraveler

sitazu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TimeTraveler

【Nコード】

N4069Q

【作者名】

s i t a z u

【あらすじ】

突然の変異で生まれた、人間亜種。

彼らは人間にない能力を持ち、時を渡ることが出来た。

そんな人間たちが集まる組織、『タイムトラベラー』

現在人数は、一千万を超える。

そんな組織にいる八人が織り成す、任務中の色々な馬鹿げたこと！
時には真剣に、敵と戦っています。

作「あらすじってこんなのか？」

幽「知らね。大体、あらすじコロコロ変えるのやめろよ。混乱する
だろ。」

作「……あ、どうぞお読みください。いえいえ、僕らのことは気に
しないでいいですよ。」

プロローグ(前書き)

どうも、sitazuiというものです。若輩者ですが、宜しく願
いします。

プロローグ

ある少年がいた。

彼は、組織に入っていた。

彼は疲れていた。

彼はある人にあることを告げると、

あとは、誰にも何も言わずに居なくなった。

そのある人は、皆が慌てふためいても、

何も言わなかった。

約束したからだ。

そのうち、混乱が収まり、組織が機能し始めた。

それから二年後。

二年の間に、その組織にも、多くの人が入った。

・・・少しの死者も出た。

そして、彼は刻み込まれた遺伝子に従い、再び動き出す。

約束の為にも、仲間の為にも、

自分の心に従い、動き出す。

プロローグ（後書き）

あ、この小説は、そこまでシリアスは入らない予定です。
面白くしていきたいと思います。

主人公より先に登場するヒロインって・・・（前書き）

幽「おい」

作「ん？」

幽「なんで俺より先にあいつが？」

作「展開的にな、これ以外思いつかん」

幽「この文才0め！」

文才0「俺の手のひらで踊っている奴がなにを！」

幽「それはどうかな！」

文才0「何！」

幽「頭の上を見ろ！」

文才0「なん・・・だと・・・」

幽「作者が再起不能になりましたので、本編をどうぞ」

文才0「・・・」

主人公より先に登場するヒロインって・・・

??? side

私は今職員室の前にいる。

別に宿題を忘れたんじゃない。

入学シーズンから少しだけ外れた今、転校してきたのだ。

理由はこの学校の警備だ。

(最近物騒だもんねえ。)

物思いに耽りながら、先生を待つ。

「ガンバローね、レイ。」

「うん!」

話しかけてきたのは、私とコンビを組むリエだ。

「学園生活は忙しそーだよね」

「うん、タイムトラベラーの仕事しながらだもんね。」

タイムトラベラー、それは人間の突然変異による人間亜種の事を指す。

そして、そのタイムトラベラーが集まる組織の名前もタイムトラベラーという。

・・・何で?

また、変異の理由は分かっていない、一説によると、人間の環境適応らしい。

一理あると思う。

世界を脅かしている存在である「オプキュリアス」。

そいつ等に対抗するには、特殊な力を持つ私たちタイムトラベラーが頑張るしかない。

彼らは別の世界にいる、らしい。

私たちと同じ力を持つんだけど、人の形をしていないランクの低い奴等を送り込んでくる。

とにかくその数が半端じゃない!

やばっ、いらついてきた。

まあ、そんなわけでこの学校、清明学園にきたってこと。
オプキュリアスからここを守るために、

主人公より先に登場するヒロインって・・・（後書き）

作「おお！もどってる！」

幽「微妙なところで終わってるが？何でだ？」

作「p s pの限界は越えられん」

幽「p cでしろよ・・・」

作「えーp s pの限界がわかったので、短くいくか、p cでいくかにします。」

幽「誰も見てねえよ」

作「・・・」

幽「・・・じ、次回をよろしく！」

主人公登場・・・？（前書き）

幽「ようやく俺の出番か。」

作「いや、主人公がお前とは一言も言っていないぞ。」

幽「はぁ！？じゃああのあらすじは何だ！」

作「あれは俺がお前と二人で前書きと後書きを進めていく・・・そういう意味かもしれんぞ？」

幽「嘘・・・だよな？」

作「さあ、本編入りまーす！」

幽「人の話をきけー！！！」

作「ちよっ、な、何してんの？駄目だって！そんなに魔力練ったら！！」

幽「消え去れえー！」

幽「作者不在で行きまーす」

主人公登場・・・？

レイside

思いを巡らす内に先生が来た。

「じゃあ、深間 理恵と松本 光付いてこい」
男の先生。優しそうです。

「どんなクラスだろうね？」

深間 理恵ことリエが聞いてくる。

「うーん。一人ぐらい私たちのことを何も知らない子が居たら良いんだけど。」

「望み薄だねえー」

二年の教室がある廊下を渡る・・・んだけど、何で一階に二年の教室なんだろう？

先生の指示で先生の陰に隠れて廊下を進む。

無駄な騒ぎを防ぐため、だろう。

(有名人も大変だよ)

心の中でそうぼやいた。

??? side

進む、進む。

俺は前を見ると、立ち止まった。

オプキュリアスの獣がいた。

(下位・・・だけど、その中での上位だな)

ソイツが雄叫びをあげる

「すぐに楽にしてやるよ」

俺はそう言うや否や、持っている大剣で十字を切り、衝撃波を飛ばした。

ソイツの体に深い切り傷を食い込ませ、声も上げさせずに倒した。
また、進む。

不意に頭から鈍い音がした。

頭に手をやると血がでていた。

上を見たとき俺が最後にみたのはアイツの大きな手だった・・・

「おい！起きろ龍牙！！すっげえぞ！」

俺は夢から覚めた。

主人公登場・・・？（後書き）

幽「は？」

作「おお！生きてる！」

幽「ちよい待て、夢オチ！？しかも龍牙って、マジで俺じゃねえの！？」

作「夢オチ、サイコー！」

幽「死ねえ！」

作「げふうっ！」

幽「殺す前に、」

作「何だ・・・？」

幽「龍牙って誰だ？」

作「読者の皆さまの混乱を防ぐために言うが、あれはな・・・」

幽「あれは・・・？」

作「次回に続く！」

幽「アル○マー！！」

作「ちよっ、」

作者の姿が見つかることはなかった・・・

俺って馬鹿だなぁ・・・（前書き）

幽「なんだ？このサブタイ」

作「・・・test」

幽「あー、そーいやぁ活動報告に書いてたなぁ。ってお前馬鹿だろ！」

作「書いてんだろーが！」

幽「そんな自虐ばっかすっからイジられんだろーが」

作「そう・・・なのか？」

幽「なんだその目からウロコみたいな顔はウザいから止めろ」

作「そう・・・なのか。」

幽「・・・駄目だ、こりゃ。そいじゃー、本編行っきまーす！」

俺って馬鹿だなぁ・・・

龍牙side

俺が目を覚ますと、前の方に見知らぬ女子が二人いた。

とりあえず、安眠を妨害しやがった友達、菅谷を殴ってから聞く。

「なんか有名人っぽいが、誰だ？あの二人」

「は！？あの二人のこと知らねえの！？現役高校生アイドルユニット『光の恵』って言ったら、日本の中で知らん人はいないぞ！」

「ここにいろだろ」

後は適当にあしらいながら思ったのは、

（あの名前で、よくここまで売れたな・・・）
ということだった。

リエside

皆からまじまじと見られてますねえ。

そう思いながら立っていると、先生が何とか静めて

「一応自己紹介しといて」

というので、することにした。

・・・一人だけ我関せず、の子がいるなぁ。後で話しかけて見よつと。

「深間 理恵です。タイムトラベラー、つまり時の旅人の仕事をしながら、アイドルをしています。皆と仲良くなれたら、と思います。よろしくお願いします！」

「松本 光です！えーっと、リエとほぼ同じなので・・・割愛します！よろしく！」

その後、先生が十二回叫ぶまで、歓声はやまなかった

・・・有名ってのはこういうときホントいらないなあ。

そう思いながら先生の話聞いていた。

俺って馬鹿だなあ・・・（後書き）

幽「なあ、あの『割愛』ってまさか・・・」

作「人には越えられない壁があるのだよ、・・・そう『psp』の字数制限』という名のな・・・」

幽「かっこつけても、お前じゃあ台無しだ」

作「うるせー！わかってんよ！」

幽「・・・つか、まじで俺でねえの？文才ゼロ」

文才ゼロ「またかよっ！」

幽「で？」

文才ゼロ「・・・企業ひ「死にさせせ！」お、おちつく」

・・・次のニュースです。

某県で、意識不明の重体の男性がゴミ捨て場に頭から入っているのが発見されました。

繰り返します・・・

龍牙の驚き（前書き）

作「前書きが長く、自分でもうざいかなあ、と思ったので今回は自重します」

幽「後、寛大いや聖人の方はこいつに、感想という食事を与えてやってくれ。」

作「それではどうぞ。」

龍牙の驚き

龍牙 side

俺はまじまじとその二人を見つめていた

光の方は髪が長く、ツインテールにしているものの、それでも肩のあたりに届いている。

身長は俺と同じくらいで、160後半といったところか。

対して理恵の方だが、こちらも身長は同じくらいだが、少し光より低い。

髪のは短めで、体育会系という言葉がばっちり当てはまる
そして何より・・・かなりの美少女だ。

女子が苦手で、女子の容姿等には疎い俺でも相当可愛いと思う・・・
って、違え！論点ずれすぎだ！

容姿云々じゃなくて、あいつ等タイムトラベラーなの！？

やっぱいなあ、そーいや約束の期限相当ぶちぎってんなあ。

まあ、あのころの俺には見えんだろーが・・・

髪はぼさぼさにして長さも伸びてるし、眼鏡かけてるし、名前も偽名だし・・・

うん、ばれねーな。うん

「えっとお、みんなに聞きたいんだけどー」

理恵の方が質問する。

どーやら、少し語尾が伸びるのは癖のようだ

「なーにー？」

男子のほとんどがハモる

お前等、幼稚園児かって。

「この写真の人見たことない？幽人っていうんだけど、この学校にいるかもしれないんだよねえ」

え？もしかしてバレてらっしゃる？

モロで俺の本名なんだけど

龍牙の驚き（後書き）

作「まさかの龍牙Ⅱ幽人」

幽「俺としては嬉しいけどさ・・・」

作「ん？」

幽「それ、ほとんどの読者にとって、意外性の欠片もないから
作「え？ いや、だって」

幽「お前の文才ごときじゃあ隠しきれん、駄作者」

駄作者「また変わってるし！」

幽「次回、俺の正体はバレるのか！」

駄作者「期待せずに待っていてくださいってゆーか、元に戻せ！」
幽「うるせえ！」

嵐の前の嵐（前書き）

作「さあ！P C投稿です。」

幽「無駄に長い…。」

作「…まあ、平均がどれぐらいか知らないけどさ。」

幽「途中で飽きるかもしれないが、読んでいってくれ。」

作「っていうか、ここまで読んでいる人いるのかな？」

幽「居ない！断言してやる！居ない！！」

作「ひっでえよ！」

幽「それではどうぞ」

嵐の前の嵐

龍牙side

やばいなあ。いくら髪の色まで変えているとはいえ……。

「うーん、こんな生徒見たことあるか？」

「いや、無いなあ。」

「龍牙！お前も見てくださいよ！」

菅谷テメエ！

お前がお前の死亡フラグ立てんならいいけど、俺の死亡フラグを立てんな！

かといって断ったら、何が起こるか分かんねえ。

タイムトラベラーの気配を消してっ…と

「はいはい」

そう言っただけは教卓の近くまで近づいた。

とはいえ、タイムトラベラーは総じて観察力が高いんだなあ…。たぶんバレるな…。

「ねえ、どう？えーっと、龍牙君？」

ちよっ！顔近っ！光さん顔近いって！

「い、いや知りませんね」

そそくさと離れる。

やっぱバレたか…？

「うーん、そっか。」

…前言撤回、こいつら低いわ。

「ココが最後だったんだけどねえ、レイ」

「うん…。やっぱり学校じゃなかったんだね…。」

チョイ待ち、こいつら全部の学校をしらみつぶしに探したっつーのか！？

何してんだ、あの野郎！権力の乱用で部下を困らせんな！

あー、もう！

絶っ対ここにいないとおかしいのに！！

ていうか、会ったこともない人を顔写真だけで見つけんのは無理が

短めの黒髪に、私と同じくらいの身長で、パツと見はかつこよくて、

たったこんだけ見つけれないでしょーが!!!

先生の一言でまた全員がぞろぞろと戻っていく。

「今日は人気アイドル歌手が来ている、という事で、」

うおおおおお！！！！！！！！！

きやああああああああああああああああああ！！！！！！！！

龍牙
side

うつるせー！

なんだこの騒ぎは！

男子だけじゃねえのかよ！ 女子もかよ！

光の恵っていう宗教団体作れんじゃね？

∴冗談はここまでにして。

とりあえずうるせえ。

「午前九時から、記念館でやるからな！全員移動しろ！」

はい！！！！！！！！

…なんだこの統率力。

全員が記念館に移動を始める。

ちつ、行かんわけにもいかんからなあ。

めんどくさいが行くか。

しかし、さつきから、ちらちらちら。

何だ？あの二人。

俺の方を見やがって。

んゝゝゝ、やっぱり疑われてんのか？

なーんか、嫌ーな予感しかないし、

…カッター持っていくか。

レ
イ
S
i
d
e

うーん、やっぱりあの人我関せずって感じだなあ。

「やっぱいたじゃん。そんな人」

「そうだねえ。」

「そこそこかっこいいんじゃない？」

「そーかなあ」

「たぶんメガネを外せば……」

と、そこまでいってメガネをはずした姿を思い浮かべてみた。

あれ？ 既視感。
デジャブ

ま、いつか。

「ライブの準備しにいいこつか。」

「おー！」

菅谷
S i d e

いよっしや――――！！！！

生ライブキターー！！

この清明学園、高校三年生ながらにしての『光の恵』ファンクラブ

会長が！

全力で参加するぜ！！

「おい、菅谷？」

「何だよ、邪魔すんなよ龍牙、せっかく集中力高めてたのに。」

後五分、後五分だ！

「いやさ、その荷物、何？」

「ん〜？メガホンに、レイ&リエうちわに、会員証に…。」

「もういい！お前何者だ！？そんなもん常に持ち歩いてんのか！？」

「当たり前だ！いつ、どこで、何が起きてレイさんやリエさんに会えるかわからんからな！」

「どんな天文学的数字だよ…」

「だがそれが起きた！会員No. 00114のこの俺が！全力で応援します！」

「因みに何人ぐらいいるんだ、そのファンの人数？」

「かるく100万人は超えてるだろうな。」

「初めてお前がすげえ、と思ったよ。」

おっ！暗くなった！始まる…始まるぞ！

「みんな、おっ待たせー！！」

「はっじめっるよおー！」

わああああああああっ！！！！

いよっしやー！ー！ー！喉が張り裂けても！叫び続けるぜ！

隣にいる龍牙が「うつるせえ」とか言ってたので、殴っというた。

嵐の前の嵐（後書き）

作「視点が変更しまくりですいません。」

幽「見にくいな…」

作「分かっていることを言うな！」

幽「俺は、お前の心にねちねちダメージを与えて、

再起不能にすることを目標としている。」

作「俺のキャラクターなのに、そんな恐ろしいことを…。」

幽「…まあ、みなさんの目を汚さないためにも、ここでつぶしておいた方がいいか。」

作「ちよっ、…逃げるっ！」

幽「あっ！…現実と同じで逃げ足だけ早いな。まあいい。そのうち…な。」

それじゃ、また次回。」

突然の・・・！

リエside

「さあ！みんなあ！はっじめるよぉー！！」

おおおおおおおおおおおっ！

曲名を私が言おうとした、瞬間。

全部の照明が消えた。

はれ？なんかのミスかな？

と思ったら、

「っ！！『リヒト・ベフォルゲン』！！」

レイの声が聞こえてきて、観客席を覆う光の盾ができた。

「ぐっ！…くっそ。」

男の人の声がした。

そしてレイの光の盾で見えた相手は…

「オプキュリアス！？…しかも、上位！？」

「リエ！緊急事態だよ、戦闘態勢！」

「うん！！」

私たちは足元に魔法陣を展開して、タイムトラベラーの能力を引き出そうとした。

人間生活じゃ、タイムトラベラーの能力は有り余るから普段はゼロフォーム、と

呼ばれる形態で生活している。

けど、

「させん！」

「わっとな…」

「ちえっ。」

いきなり迫ってきたせいで、魔法陣から離れざるを得なくなった。
うーん、めんどくさいなあ。

「どおーする？」

「・・・とりあえず」

「ん？」

レイは近くにあったマイクを手に取り

「皆！サッサと決めちゃうから少し待っててね！」
なる。

無駄な混乱を避けるってことね。

とはいえ、反応がない。

いきなり起きた事だからしょうがないか。

「…アンダーン（変身）なしで行くよ。」

「へ？」

「肉体強化の魔法掛けるから。」

「はあい。」

「話している暇があるのか？」

「ちよっ！！」

私は槍型の武器、センソリウムを呼び出し、防御する
相手が長剣でもものすごい力で押してくる。

「『フォルマカオ』！！」

すんでのところで、レイの魔法による肉体強化が終わり、持ちこたえられるようになった。

とはいえ、ゼロフォームでの魔法はさすがに弱い。

さっき、レイが敵の突進を防げたのは属性とか色々つけていなかったただの突進だったからだろう。

「この程度か。」

「どこの安い敵のセリフよ。」

「フン。『ダークウェーブ』！！」

「へっ！？」

闇の波に私とレイは飲みこまれた…。

龍牙side

…ゼロフォームであれだけの魔法を使い、無強化の状態での圧力

に一瞬耐える。

どうやら、それなりに強い奴らのようだ。

だが、この状況はまずいな…。

あの二人がダークウェーブに巻き込まれて、吹き飛ばされている。

闇の力をただ放っただけとはいえ、ゼロでしかも至近距離で受けられ

ば体には相当ダメージがあるはず。

おそらく立ち上がれんだろうな…。

つか、周りがうるさい。

案の定、身動きが取れなくなっている状態のところにもまたダークウ

ェーブをぶちこもうとしている。

…さらにうるさくなった。

それにしてもいつも思うのだが、昔の人の短絡的思考はなんだろう
か？ 闇の波だからダークウェーブって…。

ま、決まっちゃまっているものは仕方がないか。

っと、そんな場合じゃなかったな…。

(ちっ…。)

俺は両手にカッターでアスタリスクの記号の傷を刻み込むとその場
に立ちあがった。

レイ s i d e

「痛っ…」

立ち上がれない。

防御も間に合わなかった。

なんとか保っている意識で周りを見ると、目の前で倒れているリエ
がいた。

強化されていたおかげで零距離でもなんとか死んでいないようだ。

けど、もう目の前に手に闇をためた敵がいる。

ここで、終わり…？

せっかく、楽しい学校生活が出来そうだったのに…。

皆と笑ったり、映画見に行ったり、たまには喧嘩したり…。

修学旅行とか…色々…。

ヤバ…、涙…が…。

誰でもいい…、神でも、悪魔でも。

誰か…、誰か助けてよ…!!。

その時、声が響いた。

「アスタリスク・コード!
『^{ダブル}W』!!」

突然の・・・！（後書き）

幽「いきなりのバトルかい。」

作「あまりにも牛歩だったからな。」

幽「それにしても：」

作「ま、いいじゃん。それより、アスタリスクっていたくないのか？」

幽「痛いよ。それなりに深く刻むからな。」

作「そうした理由はまた次回。」

幽「見ている人はいねえよ。」

作「：自己満足で進めていきます。」

アスタリスク・コード（前書き）

作「サッカー観戦しながらの投稿です。」

幽「今回は俺の独壇場！」

作「そんなことどうでもいいんだ！」

幽「本文否定！？」

作「感想が来た！」

幽「マジか！？」

作「誤字指摘だったけど、めっちゃうれしいです！」

幽「へえ~~~~。」

作「ありがとうございました！」

幽「じゃあ、本編行きまーす。今日は少しグダグダしてる…かも。」

作「ウザっ、と思うかもしれません。」

幽「とりあえず、どうぞ。」

アスタリスク・コード

??? side

「アスタリスク・コード『^{ウエーブ}W』!!」

俺がその声の方に振り向くと、目の前が赤黒い力の塊で埋め尽くされていた。

とっさに右手にためていた闇の力で相殺しようとしたが、圧力が凄まじく、押し負ける。

俺は後ろに吹き飛ばされ、壁をぶち破った。
白煙が立ち上る。

しばらくして、煙が晴れた先にいたのは、
：見知らぬ少年だった。

龍牙 side

「大丈夫ですか？」

俺は奴を吹き飛ばした後、すぐに光さんとリエさんのところへ行っ
た。

光さんは問題がなく、リエさんも気絶しているだけのようだった。
観客席の方から、色々聞こえてくるが、無視。

「き、君は…?」

光さんの口から驚きを含んだ声が漏れてくる。

「僕ですか?…あんたらが探していた人だ。」

「へ？」

「そこで、倒れとけ。気付いてないだろうが、体はだいぶボロボロだ。」

「は、はい…。」

…少し赤くなってるがなんでだ？
おっと…。煙が晴れてきたか…。

「誰だ…？お前…？俺はお前みたいなのがいる、という情報は持っていないが…。」

「そりゃ、そうだろ。俺は、休暇中の身だからな。」

「休暇中…？」

「ま、どーでもいい話だ。」

「…殺すだけだ。」

いきなり、加速してくる。

…頭悪いのか？

「アスタリスク・コード『C』^{チャクラム}！！」

俺は、振りかぶってきた剣に対してチャクラムを添えることで、軌道を変える。

つまり、受け流した。

「なっ！」

「予想外、だったか？」

チャクラムを上からたたき下ろす。
が、つんのめった体勢からバック転をする、という離れ業をされ、避けられる。

「あの体勢からバック転かよ…。ありえねえ！。」

「簡単にやれると思うなよ…。」

「…リエさんがお前の攻撃を無強化状態で一瞬とはいえ踏みとどま
れたこと、

さらに今の動きから考えると、お前、スピード重視だな。」

「…それがどうした。今のお前じゃあ、俺にはついてこれん。それ
がわかったただけだろう。」

「それじゃあ、変わればいい。」

「何…？」

「アスタリスク・コード『A』^{アクティブ}！！！」

自分の世界を一変させる。

ただ速く。体の能力を速さだけに特化させる。

「それじゃあ、お前にならって…。」

「…？」

「よーい…、ドン！！！」

ダッシュ！！

人間の限界を超え、走る。いや、駆ける。

「消えろっ！！！」

「くうっ！！！」

チャクラムによる一撃をギリギリでガードしている。
が、チャクラムは二本ある。

俺は相手に反撃のすきを与えないよう、追撃を加えていく。

「どうした？手も足も出ていないようだが？」

「隙を見つけようっ！してるっ！ただだ！」
「ほーう。アスタリスク・コード『P』^{フィジカル}！！！」

今度は体の能力を力だけに特化させる。

…え？何で片一方ずつにしか特化させられないのかって？

アスタリスクの欠点、其の一だ。

アスタリスクには武器を取りだす、能力強化、特殊、の三つの種類がある。

特殊って言うのは、^{ウェーブ}Wのような奴だ。

そして、アスタリスクはこの三つをそれぞれ一つずつしか使用できない。

だから、^{フィジカルクタイプ}PとAは併用できない。

俺は相手の剣を力任せに弾き飛ばす。

一瞬生まれたその隙に、力任せにチャクラムをねじ込む。

「がはあああつ！！？」

「くらえっ！！！」

右手を突き出し、叫ぶ。

「アスタリスク・コード『^{ウェーブ}W』！！！」

赤黒い力の塊が相手を飲み込み、吹き飛ばした。

…やっべ、やり過ぎたか？

??? side

くそ、何なんだあいつは！

俺のスピードが一切通用しない！

どれだけ、攻めようと思っても圧倒的な攻撃量の前に防御に回らざるを得ない。

しかも、今まで見てきた型のどれにも当てはまらない…。
いや、変幻自在と言うべきか？
とにかく対応しきれない。

立ち上がる。

体中がギシギシと変な音を立てている。

とっさにガードしたんだが…。

血も出てしまっている。

…負ける。

その思いだけが頭を駆け巡る。

こいつは俺たちにとって脅威だ…。

ならば、せめて一太刀だけでも…。

龍牙 side

少しだけふらつく。

血を消費しすぎてるのか…。

アスタリスク・コードの欠点、其の二だ。

力には常に代償がある。

アスタリスク・コードは血の消費をしなければいけない。

だから、CやWは赤黒い色をしている。
チャクラぬエープ

遺伝子レベルの違いがタイムトラベラーに人間とは違う力を持たせている。

つまり、細胞一つ一つには力がこめられている、という事だ。

血による力の使用ができるのはこういった理由からだ。

相手が立ち上がった。

目の色が変わっているな…。

俺に怪我を負わせようとしても…？

「無駄だ。お前と俺では圧倒的な差があり過ぎる。」

「それでも、俺はやるんだ！お前は俺たちにとって脅威になる！この…化け物が！！」

「!!」

化け物…か。

昔はそうだったな…。

いや、呼ばれていたが正しいか。

だが…!!

「俺は、もう化け物じゃねえ! アスタリスク・コード『^{アクティブ}A』!!」

「こいつ!!」

俺は今までの速度を超える速さで駆ける。

相手の顔がスローモーで驚く表情に変わるのがわかる。

「アスタリスク・コード『^{フィジカル}P』!!」

「くそっ!」

相手の本能在剣による防御を行う。

無駄だ!

「俺は…俺は! タイムトラベラー次々期リーダー十代目! 陣流…幽人だ!」

渾身のアッパーをたたきこむ。

剣は折れ、こぶしが相手の腹に突き刺さる。

「ぐううっ!?!」

「てめーの世界に! 帰れえっ!」

アッパーを振り抜く。

相手は高々と飛び、消えた。

逃げたわけではない。

この世界における死を与えられたただけだ。

自分の世界ではない、別の世界で死を与えられる。

そうすると、致命傷の傷が治って、元の世界に戻ることが分かっている。

一説によると、世界が別の世界の生物の死を歪みと捉え、その歪みを正すためでは、と言われている。

…あー、ふらつく。

さすがに血の消費量が半端じゃない。

とはいえ、アスタリスク・コードの欠点、其の三が浮き彫りにならなくてよかった。

其の三は、バリエーションが少ない、だ。

このアスタリスク、かなり昔に作られたもので、古い文献しか残ってなかった。

そこには、アルファベット26字に割り振られた技が書かれていた。しかし、いくつかはかすれており、判読不能。

俺が使えるのは少ししかなかった。

今回は相手が弱かったから助かった、と言えるだろう。

………つか、この後、どうしよう？

俺、ばれちゃったよ？ 正体。

「龍牙…いや、幽人君！」

あー、やっぱり？

「奏谷たち呼んだから。事情説明してよね！ リーダーさん？」

はあ！？

「何してんだー！ーっ！ー！！！」

アスタリスク・コード（後書き）

作「幽人のダメージ、貧血だけかよ…。」

幽「俺は、最強設定だからな。」

作「因みに、Aの上にアクティブ、と書かれてはいますが、

こいつ実は、エーとしか言ってます。他のも同様です。」

幽「メンドクせーもん。」

作「お前はまた…。」

幽「他にもいろいろあるんだが…。」

作「次から、能力解放しちゃうもんなあ。」

幽「授業中、必死で考えたのにな。」

作「ま、どこかで補助的に使いたいと思います。」

幽「じゃあ早速、アスタリスク・コード『D』^{ダイブ}!!!」

作「そ、それは相手の精神内に飛び込む奴じゃ…。」

幽「お前ぐらい弱いのか、無抵抗時しか使えんがな。」

作「ひどっ!」

幽「つぶれろ!」

作「ぎいいいやあああああああ!!!」

幽「気絶したか…、それじゃあ、次回に続きまーす。」

幽人の元日常。(前書き)

作「PV1000突破！ユニーク300突破！」

幽「良かったな。」

作「ひとえに皆さまのおかげです。」

幽「今後ともよろしく頼む。」

作「それと、一つお知らせがあります。」

幽「何？」

作「後書きでな。」

幽「・・・なんだ？とりあえずどうぞ、今日も駄文です。」

作「って、おい！」

幽人の元日常。

リエside

あー……。いったー……。。

頭を打ったせいか、フラフラする。

ぼーっとする頭で、思い返してみる。

えーっとお、私は10月24日に生まれてえ。

確か、13時46分だったけ…。

それでえ、幼稚園行ってえ、小学校行ってえ……。
って、違う!! もう私は高校生だ!!

そーだよ、オプキュリアスが攻めてきたんだった!

戦いはどーなったの……。?

ん? レイと……。龍牙君?

何で言い争ってんの?

おぼつかない足取りで、近づいてみることにした。

龍牙side

「ふっざけんな!! なんであいつら呼んだんだよ!!」

「そんなに怒る事じゃないでしょーが!!」

「今あいつらに來られたら、ボッコボッコにされんだよ!」

「何で?」

「レイ、何があったの?」

「リエ。」

「お目覚めか。」

フラフラとおぼつかない足取りで近づいてくる。

頭にダメージが来ているようだ。

……。あんだだけ吹っ飛ばされて、よくそんなんに済んだな。

「・・・りゅーが君？だよね。」

「いや、俺の本当の名前は陣流 幽人。お前らが探してた奴だよ。」

「へ？でもでも、・・・似てない。」

「あたしもそう思ったんだけどさ、さっきの奴を倒しちゃって」
「うそお！」

なんか、向こうだけで盛り上がり始めたので、逃げる準備をする。

「ドーコに行こうとしてるのかな？」

「駄目だよおー。逃げちゃ。」

「いや、ちよつとトイレに・・・。」

「常套句、だね。」

くそっ！常套句で済まされた！

しかも、両側を挟まれた。

やばい、刻一刻と、死が近づいている・・・。

こうなれば、堂々と出口から・・・！？

「龍牙ー！ー！！」

「いいっ！？」

目の前が真っ暗に・・・

じゃねえ！生徒で埋め尽くされてる・・・。

「お前今のなんだ！」

「お前タイムトラベラーだったの！？」

「龍牙君！奏谷君紹介して！」

「俺にも今の出来るのか！？」

「「・・・スーッ！」」

二人の声に全員がぴたりと声を止める。
あの騒ぎを一声で・・・
色々すげえ・・・。

「色々聞きたいことはあると思うけどさ。ちょっと、用事があるからさ、少し待ってくれないかな。」

「はい！！！」

・・・こいつらに、リーダーしてもらおうかな。

「あ、メール来た」

「なんてえ？」

「後一分ぐらいだって」

「いっ・ぷ・ん！？」

「うん。」

その瞬間、空に白い穴があき、五人の人が降ってきた。

奏谷 side

「ぐふえ！」

一番最初に落ちた俺は、残りの四人全員を受け止める形になった。
・・・漫画でよく見そうな光景だ。

「お前らサッサとどけよ！！」

「ごめんごめん。」

「わりい。」

四人が口々に謝るが、全然罪悪感が感じられない。

「つたくよー。」

全員が下りたので、俺も立ち上がろうとする。

「ん？」

少し暖かく、かたい感触。

下を見ると、

「あっ！ゆ、幽人！」

「てめえら・・・！」

どうやら、降りた先に幽人がいたらしい。

これまたベタ・・・。

「謝れえー！！！」

「「「「すいませんでした！！！」」」」」

「よし！」

こいつにマジでキレられると、こいつが今、ゼロフォーム以下のフォーム・・・

マイナスフォームにいるとはいえ命を危険にさらされる。

・・・が、今の俺には関係ない。

「キレるのは俺のほうだろ？、ゆ・う・と君？」

「・・・なんの事でしょうか、奏谷君。あ、いや待って、そんな殺気出さないで！」

「今はノリで謝ったが・・・分かってるよな？」

笑顔で聞く。

「はい・・・。」

「二年も帰ってこんで、俺の苦勞を知れえー！ー！ー！！」
「げふうっ！！！！」

かるく、三メートルは飛んだな。

まあ、手加減はした・・・。

さすがに死なれたら困るからな。

「幽人君が言っていたのは、このことだったんだね・・・。」

「ま、二年も帰ってこない方が悪いけどねぇ。」

龍牙 side

軽く死ねる・・・。

なんとか起き上がると、誰かが手を出してくる。

「ほらよ。」

「あ、ワリい。」

こいつはフェイト、男だ。

本名は笛井^{ふえい} 颯人^{そうつと}。

略して、フェイト。

・・・我ながら無理やりだと思う。
文句なら奏谷に言ってくれ。

「せいっ！」

「おわっ！」

背負い投げ！？

「とったー！！」

「キヨ！？ぐふうっ！」

今、肘鉄してきたやつは、唯村ただむら 清見きよみ
因みに男。

肘鉄ではね上げられ、床に落ちる。

「ちょっと、三人ともやりすぎだよ！」

急いで、魔法で回復してくれるのは、ソフィア。
こいつは、まんまソフィアだ。

「『リミツタル（回復）』」

「ま、しょーがないさね。」

ケラケラ笑いながら、傍観しているのは、ネル

本名、谷村たにむら 練巳れみ

練から、練る、でネル……。

文句は奏谷な。奏谷。

「いてて……。何で!？」

「お前がやっていた仕事が大変なんだよ！」

「俺たち三人でやって、それぞれ一時間かかってんだぞ！」

「それを俺は一人でやってたんだよ！一時間で！文句言うな！」

「一年も約束の期限を延ばしやがって！」

……はあ。疲れる。

「はいはい、もういいでしょ、奏谷。」

「そうだよ。幽人君をとっと本部に連れ帰らなきゃ。」

レイとリエが言う。

二人ともすでに力を一段階解放して、体の傷を回復している。

「そうだな・・・。」

奏谷はそう言うが、俺は帰りたくない・・・。

こんな騒がしい日常になるんだぞ？

・・・ま、楽しいからいいか。

幽人の元日常。(後書き)

作「本文で触れてないですが、レイとリエはソフィアとネルから幽人について色々教えてもらってます。」

幽「あいつら・・・俺の力が戻ったら・・・！」

作「ゆ、幽人！おちつけ！」

幽「あ。お前がいたな。」

作「ちよっ！待て！」

幽「ま、あいつ等にしないと気がすまん。」

作「セーフ！あつぶねー。」

幽「ところで、お知らせって？」

作「ああ、実はp s pが・・・」

幽「使えない？」

作「そう。なので、これからはp c中心になります。」

幽「・・・つまり、駄文を長く読まないといけないわけね。」

作「そんなわけで、更新も微妙になっていく、と思います。」

幽「こんな作者だが、・・・まあ、見捨ててもいいぞ。」

作「って、おい！・・・じ、次回も宜しくお願いします！」

幽人、久々の帰宅（前書き）

作「ようやく、手直ししました。」

幽「ほぼ、何も変わってない気が……。」

奏「ああ。俺もそんな気がする。」

作「うお!? いつの間に!」

奏「なかなか、呼んでくれないから、こっちから来た。」

作「二人……だと……。」

幽「楽しくなるな!」

作「いやだあああああ!」

奏「ま、そう言うな。」

幽「それでは、どうぞ。」

幽人、久々の帰宅

龍牙 side

はい、というわけで本部にやってきました。

中の様子はほとんど変わってない。

あの後、先生に無理やり、無期限に学校を休みます的な書類を出した。

全員には「その内帰ってくるから」とか言って、質問を全部ぶっちぎってきた。

少しひどい？ 知るか。

「幽人、これ渡しとくから後でチームルームに来てくれ。」

「・・・何これ。」

「『解針』だろ。」

「あ、あれね。すっかり忘れてたわ。サンキュー。」

「解針って？」

レイが聞いてくる。

因みに、あの後ライブは続行

その間、俺たちはボーっとしてた。

「解針って言うのは、幽人がマイナスフォームからゼロフォームに移行するためのものなの。」

ネルが答える。

こいつ、いきなり学校にファンクラブ作りやがった。

奏谷が少し嫉妬していたのが、ウケた。

「何で必要なの、そんなものが・・・」

「マイナスフォームはタイムトラベラーの力を極限まで抑えたもの。つまり、ゼロフォームに移行する ための力なんて、全然ない。だから外部から力を加えることによって移行しないといけない。それがこの解針なんだ。」

「・・・そんなフォームに変身する意味って？」

「ゼロじゃ普通の人間と生活するには力があり過ぎるんだよ。例を上げると、さっきの敵をデコピンで 倒せるぐらいが俺のゼロフォーム だ。」

「・・・納得しました。」

俺は、説明を終えた後、自分の部屋に行くことにした。

・・・だーれも掃除してくれなかったのかよ。かなりほこりが落ちている。

だが良く見ると、俺の机のところまで往復した足跡が残っていた。

「誰かが何か取っていったのか・・・？」

おれはそう疑い、机のところまで歩いて行った。

机の上を見ると、見たことのある形の大剣と銃が二丁、そして手紙が置いてあった。

『綺麗にしておきました。 レイ&リエ』

「・・・何をだ。」

どこも掃除されてないじゃん。この部屋。

・・・あ、この武器のことか？

これを掃除するぐらいなら、部屋を掃除しといてくれ・・・。

ま、ありがたいっちゃありがたいが。

でも何でこの二人なんだ？

剣に光の力を流してみる。

刃が光の力で構成される。

この両刃の大剣は銘をディヴァース。

何語かは忘れたものの、確か『分割する』という意味だ。

中央に線が入っており、そこで二つに分けることが出来る。

ま、二刀流に出来るってことだ。

因みに、刃を構成できる属性は多々ある。

まだ色々あるんだが・・・。

とりあえず、俺は大剣と銃二丁を携え、チームルームに行くことにした。

フェイトside

ってなわけで、俺のターン！

・・・ウソです。引かないで。

今、俺たちは幽人と別れた後、時間を潰している。

三十分後に集合予定だ。

このタイムトラベラー本部は、他の支部もそうだが、かなり設備が整っている。

支部は世界中にあり、数は・・・覚えてない。

大体、国会に属する場所の地下深くにある。

商業設備はもちろん、娯楽施設から何から何まで揃っている。

通貨はその国のものになる。

だから、各支部、本部には交換所がある。

・・・正直面倒だ。特殊な通貨を作って、タイムトラベラーの中だけで流通させればいいのに。

ただ、かさばらないように、タイムトラベラー内では電子マネー方式が使われている。

というか、ココだけの話、タイムトラベラーでは、科学が地上よりかなり進んでいる。

理由？それはな・・・おっと、時間か。

そろそろチームルームに行くか。

龍牙 side

俺は今チームルーム前にいる。

チームって言うのは、文字通りタイムトラベラーが何人かが組んで作るものだ。

因みに俺のチームの名前は、『ワールドクリエイター』……。

ちよっ、待て！俺を責めるなあああああ！！！！

文句は奏谷だ！後、悪乗りしたフェイトだ！

……部屋の中に入りまーす。

……全員談笑中。

っーか、このチームが始まってからずっとこんな感じがするんだが。

ま、楽しいのが一番なんだけど。

久々に帰ってきたしなあ。

……いじめますか。

「おい、早速だが、俺流の訓練を久しぶりにするぞ。」

レイとリエ以外の全員が音速で立ち上がり、ドアから逃げようとする。

マジで音速だった。そこら辺が、ソニックウェーブで吹っ飛ばされてる。

だが、俺は予測済み。

「『チャマ・マウヤー』」

炎の壁が入口に立っていた俺の前に立ち塞がる。

「嫌だ！」

「通せ！幽人！」

「お前の訓練は訓練じゃない！イジメだ！！」

「そーよ！」

「二日は普通の生活できないのに！！」

「皆どうしたの！？」

「慌てすぎだよ？」

俺は笑みを浮かべながら、

「さ、訓練室に行こうか？」

「「「「いやだ！」「」「」」」

ダダをこねる五人を引きずり、さらに状況を理解していない二人を連れて訓練室に行く。

・・・さあ、訓練と書いてイジメという名のワンサイドゲームを始めようか。

幽人、久々の帰宅（後書き）

幽「次回が楽しみだぜ・・・」

奏「なんとかしてくれ！作者！」

作「いや・・・。こいつには逆らえん・・・。」

奏「そんな・・・俺たちを殺す気か！？」

幽「安心しろ、一日ぐらいで元に戻るようにしてやるから。」

奏「そんなこと言っていて、二日かかっただろうが！」

作「あ、そうなの？」

奏「もう嫌だぁー・・・。」

幽「・・・再起不能か。」

作「じ、次回に続きます！！！」

特訓（イジメ）開始！！（前書き）

後書きとか、その他もろもろは後です。

特訓（イジメ）開始！！

レイside

訓練室に到着です。

最強と呼ばれているランクZ 幽人の訓練。

・・・みんな怖がってんのが気になるんだけど。

あ、ランクの説明まだだったね。

ランクは強さを表わすもので、D、C、B、A、S、T、Z
までの、えーと12？段階に分かれてるの。

Zはリーダー限定で、今は三人。

当の私は・・・S、このメンバーの中では一番下のランク。
といっても、三人いるんだけどね、このチーム内には。

「よし、設定完了。」

幽人が特訓室の設定を終えたみたい。

さて、どんな事が起こることやら・・・。

キヨside

もうヤダ・・・。

またあの訓練が始まるのか・・・。

「幽人、考え直さねえのお？」

俺が愚痴る

「あの時の仕返しだ。」

・・・やらなきゃよかった。知らない人は少し前の話を参照。

「ささ、入れ。」

幽人がにこやかな笑顔で言う。

対女子だったら異常な威力だろう。

ん？

・・・確かに威力は強いな。

レイとリエが少し昇天しかけている。

人の夢と書いて儚い。

幽人は恋心などとは無縁の存在だ。

あいつらが無残に撃沈しないことを祈る。

他のメンバーが渋々、特訓室に入っていく。

因みにこの特訓室、空間を拡張しているので、大体300～400ぐらいある。

この中は少し特殊な空間になっているんだが・・・

「キヨ、入れよ。」

「ああ、ワリい」

幽人にせかされる。

ま、死ぬわけじゃねえし。

腹くくりますか。

龍牙 side

さて、今全員が特訓室の中にいる。

俺は、性質上、VRルームの方が良いんじゃないかね？と提案したんだが・・・

八代目と九代目はこの名前に愛着があるらしく、却下された。

性質上、VRルームの方がいい、というのは、

この空間では、攻撃はすべて空想となる。

簡単に言うと、実体のない攻撃と云えばいいだろうか。

熱さを感じないし、痛みも感じない。

・・・じゃあ、なんであいつらが怖がっているのかって？

確かに実体はない。

けれど、その実体のない攻撃に当たると、外に出た時体力を削ぎ落とされる、

というおまけが付いてくる。

あいつらは、その体力を限界を超えて削られるのを怖がっている、というわけだ。

「始めっぞ」

「「「「・・・」」」」

「「はい」」

・・・言わなくてもわかるよな？

「んじゃ、一人ずつ来い。とりあえずな。」

「はぁ、仕方ない、やりますか。」

「・・・珍しいな、奏谷」

デカイ剣を持って奏谷が出てきた。

「俺だって今まで何もしてこなかったわけじゃないんでね。試してみたい、というのがある。」

「ほーう」

俺もディヴァースを構える。

「奏谷、頑張ってね！」

「任せとけて」

ネルの前では、少し性格変わるんだったな、あいつ。

あ、因みに二人は付き合ってる。
俺？キョーミない。

「いくぞ！」

「来いっ！」

奏谷が大剣を大きく振りかぶり

「『真空烈波斬』！！！」

「俺のを我流に改造したかつ！」

真空波が飛んでくる。

因みに、現実世界では真空でモノが切れる、という現象は起こり得ないそうだ。

つまり、あれは魔力の塊。

「よっ・・・と！」

ディヴァースの刃の部分で受け流す。

刃は光で構成されているため、魔法を受け流すことが出来る。

「ちえっ。」

「お前に、マホーは似合わねえよ。」

「だろうな。」

「油断すんな！『炎空烈波斬』！！！」

さっきのを炎で構成したものを奏谷に飛ばす。

「ちよっ・・・！おわっとお！」

ギリギリで避けられる。

身体能力の高さは変わらず・・・いや、より高くなったか？

「・・・ま、そこそこかな。」

「お前から見たらそんなもんかよ・・・。」

「ま、そう言うな。」

「くそっ！『ディプレッサ（走）』！！」

身体能力を著しくあげる。

俺のアスタリスクコードとはまるで比べ物にならないぐらい上がる。
が、俺も今は違う。

目の前に向かってきた剣をディヴァースで受ける。

奏谷の勢いは止まらず、二撃、三撃と加えてくる。

「ほっ！」

奏谷の剣と垂直に交わらせ、つばぜり合いに持ち込む。

「しまっ・・・！」

「まずは一人目だ！『ロッヘ・アンウェッタ（炎の暴風）』！！」

「————！！！」

奏谷が炎に包まれながら吹っ飛ぶ。

え？VRだって？

吹っ飛ばないと現実味がないだろ

因みに、今のが現実なら体中が引き裂かれるというおまけが付いてくる。

「・・・大丈夫かー？」

なんとかフェイトとキヨに受け止められたようだ。

「・・・おれ、外出たくない。」

「さて・・・次はどうだ？」

俺はにこやかな笑顔で聞いてやった。

現実逃避が一番だ!! (前書き)

作「非常に遅れてしまいました・・・すみません!!」

幽「くくく。」

奏「んだよ、幽人？」

幽「これで誰も見なくなったな！」

作「怖いことを言わないでくれ・・・」

レ「見～すて～られた～♪」

リ「作者～♪」

作「うっさい!!」

幽「本編行きまーす」

現実逃避が一番だ!!

リエside

・・・やらなきゃよかった。

心からそう思った。

ま、やるしかないんだけどさ。

すでに、例の五人は、

「これ以上したらマジで命にかかわるから」とか言ってVRルームの隅で休んでいる。

それぐらいに激しい攻撃だった。

圧倒的な戦闘センス。

それしか感じられなかった。

因みに、奏谷はあの後五回立ち向かったけど、全部吹っ飛ばされていた。

で、私たちは初めてだから、レイと二人で戦うことに。

「さてと、ささっと終わらせるか。」

「そう簡単には終わらないよ!」

「リエ・・・それは死亡フラグじゃ・・・。」

気にしない! 気にしない!

私はセンソリウムを出して、戦闘準備をした。

リエside

リエがセンソリウムを出す。

私は中央に魔力を増幅する機械を取りつけた二枚の円盤を取りだす。銘は『トラベッサ』。

このトラベッサは円盤の周りに魔力で刃を作り、チャクラムのようにすることもできる。

つまり、遠距離兼近距離武器、と言ったところかな。

読みづらい？

気にしちゃいけないよ。

しかも、これは二枚あって遠距離操作をして敵をオートで攻撃できるすぐれもの！

さらにさらに、枕をプラスしてお値段は驚きの————！！

「レ〜イ〜？まーた脳内テレビショッピングしてんの〜？？」

「！！ご、ごめん・・・。」

「その癖、止めなよ。」

「おーい！はじめんぞ！」

幽人が早くしたそうでウズウズしている。

・・・Sだなあ。

私はトラベッサを構える。

「よし！始めんぞ！！」

「レイ！いつもの！」

「うん！『フォルマカオ』！！」

全身強化の魔法をリエにかける。

力を開放しているからあのときと比べて断然違う。

リエの身体能力が跳ね上がる。

「さあ、行ってこーい！」

「レイは何時も無責任だよねえ」

リエが愚痴るけど、気にしない、気にしない！

幽人 side

リエが突っ込んでくる。

直線的な動きだ。

手で槍の柄を掴み、止める

「あつつつ!!」

「あははは!!」

急に槍が燃え始めた。

何だ、こりゃ!

「どーよ!」

「・・・まさか、精神感応物質?」

「・・・おつどろき。まさか当てるとはね。」

まじで?

精神に反応するってことは、ちょっとでもなんか別の精神が入ってしまうと別の事が起こる。

そんな、超不安定物質を武器に流用するとは・・・。

「ほっ!」

「くそっ!」

いきなり炎に包まれた槍を振ってくる。

ディヴァースでギリギリ防ぐ。

くっそ、油断した・・・。

片手でディヴァースを持ち、センソリウムを防ぎながら右手を突き出す。

「『ロツヘ・アンウェッタ』!」

「へっ！？ちよっ！」

リエがセンソリウムを盾に替えてくる。
そんなことまで出来んのかよ……。

「うー、強化してんのに。片手で防げんの？」

「ま、俺が規格外なだけだ。」

「ちえっ。」

っていうか、飛びすぎだろお前。

レイのそばまで飛んでいる。

……なんか、ゴニョゴニョしてんだけど。

すると、リエがセンソリウムを長い筒に変化させた。

俗に言う、ロケットランチャー……か？

レイがトラベッサを浮遊させ、そのロケットランチャーの前に安定させる。

「……面白そうだ。」

俺はこっそり呪文を唱える。

「レイ。行ける？」

「オッケー！行けるよー！」

「よっし！逝っけー！！」

ん？

……漢字違うよな？

「リエとレイのダブルアール・スペシャルアタック
特別攻撃！！！」

膨大な量の光の力が放たれる

・・・よし、あいつらにネーミングセンスというものをいつか教えてやろう。

「対魔法用魔法陣展開。」

大・中・小、三つの円が並んだものが出てくる。

大と中の間には複雑な文様が描かれている。

「『アブソルブション（吸）』」

膨大な光の力は、魔法陣に当たると全て吸い込まれてしまった。
複雑な文様が少しだけ光る。

・・・こんなもんか。もうちょっといけると思ってたんだけどな。

「へ？」

「はい？」

驚いているが、無視。

そろそろ俺も疲れてきた。

「『ロスラッセン（解）』！！」

魔法陣から光の放流が逆流してくる。

すでに俺の魔力もプラス済み。

「ほえ！？リヒト・ベフォル・・・！！」

・・・あ、間に合わなかったか！。

膨大な光に巻き込まれ、二人が吹き飛ぶ。

白煙の向こう側から

「これ大丈夫なのー!？」

「リエ・・・あきらめた方がいいよ・・・。」

「うー。」

とか聞こえてくるが、ま、レイの言うとおりにあきらめてくれ。

「さて・・・全員出るぞー。」

俺がだらけている五人に言う。

「俺、ここで一生暮らすわ。」

「何言ってるんだ、キヨ」

全く・・・

「俺もー」

あれ？ 奏谷君？

「あたしも」

おーい、ソフィア？

「ここに家建てようぜ」

フェイト・・・

「あ、それ良ーね」

ネ〜ル〜。

・・・ちっ、こいつらは!!

「・・・さっさと出るぞ。」

「「「「離せえ!!!!」」」」

「うるせえ!!」

首根っこをひっつかみ出口に向かう。

レイとリエはこの後に起こる事がどれだけ大変かを理解していないため、何もしなくともついてくる。

さて・・・。

この後がめんどくさいのは、俺なんだよなあ・・・
ま、いつか。

特訓後の日常。(前書き)

幽「そろそろPV4000超えそうだな・・・。」

作「・・・そうだが？」

奏「まーた何かする気かよ？」

幽「というわけで、特別企画をしよう。」

作「なにするんだよ？」

幽「ま、俺に任せとけよ。」

奏「なにする気だよ・・・。」

作「なんか怖いんだが・・・。」

幽「くくく・・・。んじゃ、本編行きまーす。」

特訓後の日常。

レイside

頭がボーっとする。

白い天井が見える。

えーっと？ 確か、特訓室から出た瞬間に気が遠くなって・・・。

「ひゃうっ!？」

頭に鋭い感覚が走る。

冷たいタオルがのせられてる。

「・・・あれ？起きてた？」

頭の上から幽人の声が聞こえた。

幽人side

「一番早く目が覚めたな。」

とはいえ、丸々一日寝ていたがな。

「うー、ギシギシする・・・。」

「あんだけの激しい動きの後、ストレッチ無しでずっと寝てたからな。」

俺がしてやっても良かったんだが、流石にな・・・。

「ココは？」

「・・・答えなきゃダメか？」

「・・・病院ですね、はい。」

まあ、レイが言った通りここは、タイムトラベラー内にある病院だ。しかしまあ、設備が整ってますこと。

ヤバイよ？ここ。

死亡サイン・・・つまり、瞳孔反射、心臓停止、自発呼吸の消失が確認されてから一時間たっていても、今のところ百パーセント息を吹き返している。

因みに、この副主任の医者はネルだ。

主任？またいつかいようよ。

「ところで、さっきから何ニヤケてんの？」

「へ？何でもねえよ。」

頭をなでてやる。

・・・顔が赤いな。風邪も引いてんのか？

「ま、もう少し寝とけ。」

「う、うん・・・。」

しかし、笑えるわ。

フエイトside

くあ。

んー、体が痛い・・・。

ギシギシするなあ。

ん・・・？

「何だよお！これ！」

奏谷？何叫んでんだ？

「どうしたよ？」

いてて……。体がいてえ、動きづらい。

「これ見てよお！フエイトお！！」

「どうした？ソフィア……。！？」

なんだその顔！？

……。幽人か。

ん？

って言う事は俺も落書きされてんのか。

因みに、落書きの種類は二パターン。

女子が猫で、男子が……。よくわからん。

何かの動物なんだろうけどな。

いつものごとく、バリエーションが狭い……。

「はあ、今回はまだましかなあ。」

「……。どういう事？ネル。」

リエが不思議そうに聞いている。

「一番ひどかった時は、みうんな逆さにされててさ、頭に血が昇ってて危うく死にかけてたね。」

「あれはやバかったよなあ……。」

ネルとキヨがしみじみと語る。

ま、確かにヤバかったなあは……。

「おっ、全員起きたな？しかし、お前ら笑えるわ。」

「「「「ゆ・う・と?」「」「」」

「すまんすまん、ついな。」

「つい、でこんなことするな!」

「そう怒るなよフェイト、お前の好きな甘いもん買ってきたからさ。な? あ、皆の分もな。」

「「おおー!!」」

リエとレイが声を上げる。

ま、無理もない。

あの有名なゴ○イバじゃあなあ。

え?

甘いものが好きなのに何でテンション低いんだよって?

あいつの贈り物じゃなけりや、素直に喜ぶさ・・・。

ま、リエとレイが勝手に実験台になってくれそうだ。

あいつらで確認してからもうとしよう。

ひどい?

あいつは何してくるかホントにわからないんだ・・・。

察してくれ・・・。

「ほい。」

「サンキュっ!!」

「ありがとう!」

幽人が手渡ししていく。

さあて、何が入っていることやら。

「「甘い!」」

「・・・マジ?・・・幽人、ちょうだい。」

「ほい、ネル。」

「・・・甘い!? 今回はなにも入れてないの?」

「俺もそこまで酷じゃねえよ・・・。」

・・・マジでなにも入れてないんか。

「幽人！俺も一つ。」

「ほらよ。」

見た目は問題ないな・・・。

「そこまで疑うなよ・・・。」

ま、あの三人が大丈夫だったしな・・・。
ポイツとな。

うん、甘・・・！？

があああああああつ！？

「かつ、かはっ！けはっ！」

「フエイト！？」

「ソ、ソフィア！げほっがはっ、ミドゥほってひて！」

「御堂掘ってきて！？何それ！」

「ひがう！！ミドゥ！！」

「だから何！？」

「ははははははっ！！」

奏谷、この野郎・・・。

「くっくくく・・・マジでうける！」

キヨまで・・・！！

「バーカ。俺、手渡しで渡してたろーが！」

・・・言われてみりゃそうだが、そんなことより！！

「み、水・・・！」

「あ、水！？今すぐ持ってくるよ！」

ん？・・・っていうかさ！！

この状況でろれつが回らなかったとはいえ、水は第一に持ってくるもんだろ！？

まったく、この天然記念物が・・・。

そんな奴が俺の彼女なんだから、困ったもんだ。ま、そこが愛らしいんだがな。

幽人 side

いやー、面白かった。

こんな時の為に調合しといてよかった。
・・・フェイトもだいぶ落ち着いたな。

「いやー、面白かったよフェイト君？」

「お前いつか覚えてろよ・・・」

「そー言うなよ。ほら、ちゃんとした奴。」

「ホントだろうな・・・？」

「今度は大丈夫だって。」

流石に俺もそこまではしねえよ・・・。

「まったく・・・うん、甘い。」

「な？」

「しかし、そんなに辛かったのか？」

「おいおい奏谷君、俺調合だぜ？辛くないわけがないっ！」

さて、もうだいぶ夜も深いな・・・。

あんだけ馬鹿騒ぎしたから、俺も眠い・・・。

「おい、そろそろ寝ようぜ。お前らも完治してないんだしさ。疲れただろ？」

「主にお前のせいだな・・・」

「そう言うな、フェイト、マジで悪かったから。・・・んじゃー、お休み。」

「「「おう。」」」

「「「お休みー」」」

息ぴったりだな！？おい！！

・・・それにしても眠い。

ゆっくり寝るか・・・。

特訓後の日常。（後書き）

幽「マジで大変なんだからな、実は。」

奏「イタズラしてただけだろーが。」

フ「そうだったーの！」

作「なにが大変なんだよ？」

幽「いやさ、看病は大体俺がやってんだよね。」

奏「それが？」

幽「だから、点滴入れ替えたりとか・・・まあ、色々してるわけよ。」

「

フ「？大変か？」

幽「よく考えたら、大変なんだよ・・・主任の助けがあってもな。」

「

作「あー、分かる気がするわ。」

奏「読者は分かってねえよ。」

フ「確かにな。」

作「んー。じゃあさ、お前らが一切動かずに一日を過ごす事を考え

たらいい」

奏「・・・は？」

作「困ることがいろいろあるだろ？」

フ「分かん。」

幽「・・・んじゃあ、一日中ベッドに縛り付けてやるよ。」

奏「いや、やめろよ！」

フ「え、ちょ、まじで！？」

作「あーあ・・・次回に続きます。」

幽「特別企画！！グダグダ会議が始まります！！」

幽「と言うわけで、ミス荒探し会議を始める！」

菅「俺もいます！」

作「おい！！なにする気だ！！」

奏「何も聞いてないんだが・・・」

ネ「っていうかさ、菅谷って誰？」

菅「・・・読者なら分かってくれるはず。」

幽「良いから始めっぞ。」

作「だから何だ！ミスって、まさか俺のか！？」

幽「お前の以外に何があるんだ。」

菅「じゃあ、前にある十三枚の紙を見て、ミスを見つけた人は挙手！」

作「おいっ・・・！」

ネ「・・・これは、今までの小説？」

幽「そうだ。んじゃ、探してくれ。」

リ「ねえ、なんか塗りつぶされてんだけど。」

レ「あたしのも。」

幽「ああ、そこは絶対にミスがないと分かっているところだからな。消しといた。」

レ「へえ。」

ネ（ねえ、塗りつぶされている所ってもしかして……。）

幽（そう、ネーミングセンスに関する所だ。あの二人の紙だけ塗りつぶされてる）

リ「はい。」

菅「はい……。何ですか？」

リ「一話目と九話目。」

レ「一話目からミス!？」

作「なんかミスったか……。」

幽「お前ならありうる」

奏「ああ。」

フ「ありうるな」

ネ「・・・なんかミスってる？分かんないんだけど。」

奏「あ、俺もわかった。」

菅「で、理恵さんどうぞ。あと、サイン下さい。」

リ「後でね。なんか、幽人が出て言った理由を聞いている人が一人しかいないように書いてある。つまり、帰ってくる期限を聞いている人も一人しかいないはずだけど・・・。九話目では、全員が期限の事を知っているっぽく書いてある。そこがミスだと思う！」

幽「よく気付いたな・・・。」

菅「読者の方々、分かりにくかったら感想の方で。」

ソ「で？作者。言い訳は？」

作「・・・その理由を聞いていた人は実は九代目で、その、えーつと混乱が起きた時にそれを収めるために、九代目が皆に言った・・・。」

リ「でもさあ、『その男は何も言わなかった』って書いてあるよ。」

作「・・・（汗。えーつと、一年経った時に、九代目が『探しに行け』って言って、それで約束の期限がわかって、一年探してやっと幽人が見つかった・・・。じゃ駄目ですか。」

ソ「ま、筋は通ってるね。」

幽「じゃあ、次。俺が言うぜ。」

菅「どうぞどうぞ。」

作「え?・・・ぱっと見、ミスってねえぞ」

幽「作者のテストの結果が書かれてない。」

作「誰が書くか! 恥ずかしくて書けんわ!!」

幽「冗談だって、・・・ちっ。」

作「舌打ち!?!」

幽「あ、俺が言えばいいか。」

作「流石に勘弁して下さい、幽人様!! orz↑土下座」

幽「まあ、いいだろ」

フ「かなり気になるんだが。」

ソ「うん。」

ネ「教えてよ。」

幽「後でな。次!ぱぱっと行くぞ。メンドくせえから」

作「結局言うのかよ!?!」

レ「はい。」

菅「何ですか？」

レ「第六話で、菅谷君が会員番号00114になってるけど、会員が百万人っておかしくない？」

作「・・・確かに。」

幽「あいたー、これはアホだなあ。」

キ「言い訳は？」

作「さっきからちよいちよい思ってたけどさ、言い訳って言わないで。せめて、訂正って言って・・・。」

奏「言い訳は？」

作「・・・菅谷は、00114ってところから分かるけど、114人目の会員だろ？要するに、まだ『光の恵』が売れ出した直後で、このぐらいでいいか、っていう感じで作られたから5桁までしかない・・・。っていうことで許して下さい。」

幽「要するに、後の会員はちゃんとしたものになってると。」

作「そう言う事で。」

菅「えーっと、俺からでもいいか？」

奏「なんか菅谷が思いっきりなじんでる・・・。」

キ「ある意味凄いな。」

幽「ま、それが菅谷の特徴だ。んで？」

菅「えーつとさ、理恵さんと光さんのネーミン」

作「奏谷！！」

奏「真空烈波斬^{しんくうれっぱざん}、弱！！」

菅「うおおおおおっ！？」

幽「大丈夫か！？いま目に見えない何かにとんでもないことを喋らされそうになったな！（棒読み）」

奏「俺が吹き飛ばしてやらなかったら大変なことになっていたな！（棒読み）」

菅「なにすんだよ・・・俺はただ」

幽「喋らされそうになったんだよな！（棒読み）」

菅「はい・・・。」

奏「あつ、そう言えばネル、リエとレイを連れて買いたいものがあつたんじゃないか！？（棒読み）」

ネ「・・・そつ、そうだった！！ついてきてくれる？」

リ「へ？」

レ「・・・良いけど、今すぐ？」

ネ「う、うん！」

レ「いいの？幽人。」

幽「いいよ。行って来い」

リ「じゃー行ってきます。」

ソ「行ってらっしゃーい。」

キ「・・・あつぶねえ。」

菅「なんなんだよ・・・。」

作「奴らに自分のネーミングセンスが悪いことを気づかせてはいけない。」

幽「俺が治す予定だからな。」

フ「・・・言っても治らん気がするがな。」

ソ「で？なに？」

菅「いや、ネーミングセンスが悪い悪いと言ってる割には、『フォルマカオ』とか『リヒト・ベフォルゲン』とか普通の奴もあるなあって。」

作「あー、その話ね。まあ、説明不足だったわな。」

幽「今言った二つは、基本魔法であって全てのタイムトラベラーが使えるんだ。だからネーミングが普通なんだよ。」

菅「なーる。」

ソ「ねえ、その説明の為だけに三人がどっか行っちゃったんだけど・・。」

奏「仕方がない犠牲だったのさ・・。」

幽「さて、作者、最後にしたい言い訳は？」

作「（最後？）・・言い訳っつーより、説明したいんだが。」

キ「何の？」

作「フォームの・・。」

奏「・・・確かにされてねえな。」

菅「ふぉーむって何だ？」

幽「よし。分かってない奏谷君と作者救済の為に説明してあげよう。」

キ「フォームには基本とオリジナルがあって、基本が五種類、オリジナルは各タイムトラベラーが持っている、自分で作ったフォーム

のことだ。」

フ「つつても、オリジナルも流用が起きていて、同じものを使っている奴も多いがな。」

幽「あと、キヨ、基本は五種類じゃない、六種類だ。俺のマイナスフォームが入ってねえぞ。」

奏「あれって、基本だったのかよ……。あそこまで力を制限するフォームはお前しか使わんから、お前のオリジナルなのかと……。」

菅「結局フォームって何なんだよ！根本的な説明になってねえぞ！」

作「フォームは、力を制限するもので、周りに人がいる時や建物がある時などに自分の力で被害が及ばないようにするためにある。」

ソ「……それってさ、ランクで制限されてるんじゃないの？」

キ「……ランクでも力の制限ってあったのかよ!？」

フ「知らなかったのか？とはいえ、ランクによる力の制限はSまでだ。お前には関係ねえよ。」

菅「……分かったような、分からなかったような。」

幽「まあ、分からなくても明日死ぬわけじゃねえし。良いだろ。」

菅「……まあな。」

幽「さて・・・。」

作「ん？どうした？」

幽「このグダグダになった会議の責任・・・取ってもらおうか？」

作「へ？ちよつ、ま」

幽「『ロツヘ・アンウエツタ』！！」

フ「・・・」

キ「・・・」

ソ「・・・」

菅「・・・」

奏「文字通り、塵も残らなかったな・・・」

ソ「今思ったけどさ、あたし達作者の尻拭いさせられただけ？」

幽「・・・ちよつとあいつの世界に行ってくる。たぶん今の一撃で、もとの世界に戻ってるはず・・・。」

奏「・・・ご愁傷さま、だな。」

フ「うっし、飯食いに行こーぜ。」

ソ「あの三人も迎えにいかないとね。」

キ「菅谷も来るか？」

菅「いいのか？」

キ「お前が良いならな。」

菅「喜んでいきます!!」

奏「おっしゃ、そいじゃー行きますか！」

キ「それじゃ、皆様、今日の会議のように、矛盾点、説明不足、その他もろもろがございます。」

フ「いつでも感想は受け付けているので、ガンガンどうぞ。誤字脱字とか。」

ソ「それじゃー皆様。また次回!!」

幽「特別企画！！グダグダ会議が始まります！！」（後書き）

幽「さ・く・しゃ？」

作「うおっ！？何で！？」

幽「くらえ！第八話ぐらいで使った、渾身の！」

作「待て！はなせば」

幽「右アツパーカットお！！」

作「げふうっ！？」

幽「・・・よし、それじゃ、皆様。バカ作者に代わりまして、非常に投稿が遅れたこと、今までにない位のグダグダ、駄文だったことをお許しください。それでは、また次回！！」

合宿の警護なんて……

幽人 side

「ああ、……………ヒマだな。」

……みんな、思い思いのことし終わってダラけてるし。

俺もルービックキューブ5×5を30周ぐらいしちゃったし。

……ヒマだ。つか奏谷どこ行った。

「依頼持ってきたぞ！」

「……ウソじゃねえだろうな？ 奏谷？」

ずっと前に、似たような空気を良くしようとして奏谷が依頼持ってきたとかウソ言った事がある。

その後、皆に半殺しされたがな。

あの日の事を覚えていないわけじゃあ、あるまい。

……というか、ウソについて暇な状況を打開しようとする意味がわからんのだが。

「ウソじゃねえよ。ほれ。」

端末を投げつけてくる。……もうちょっと丁寧に扱えよ。

「……ん？ 生徒の警護？」

「これってさ、私たちがやるようなレベル？」

ソフィアがもつともなことを言う。

確かに、これは俺たちがやるようなレベルの高さじゃない……が、

「何か理由でもあるのか？奏谷。」

「幽人、お前に名指しで依頼が来たらしい。」

「はぁ？」

「どこの学校だ？そんなことしやがったの？」

「フェイト、お前の疑問の解決先はこちらだ。」

キヨがさっきの端末を自分のパソコンに接続して、具体的な情報を引き出す。

端末には、かなり強いセキュリティが掛けられている。

だから、キヨみたいに一々パソコンにつないでセキュリティを破壊しないといけない。

下のランクの奴らは、よく解除できなくて上の連中に助けを求めたりする。

九代目のお遊びなんだが……、いい加減にしてほしい。
正直面倒くさいんだ。

「清明学園……？」

……なんだと？

「もう一回言ってくれ。フェイト。」

「清明学園。」

「没の方向でいいか？」

「なんで！？久しぶりにみんなに会えるのに……。」

「そうだよ……。」

「ウソ泣きはやめろ。レイ、リエ。」

めんどくせえーもん。あいつらに会うの。

「大体俺らじゃなくていいだろ。」

「……ネル。やれ。」

「あいよ。奏谷。」

「痛っ!!」

首筋に激しい痛みが走る。

反射的に刺さったものを手に取り、見ると――――。

注射器だった。

「なに……しやがん……だ……。」「

俺は意識を手放した……。

ソフィア side

どうも。ソフィアです。

酔い止め飲んでけばよかった……。

今、バス車内です。

あの依頼は合宿の生徒の警護だったんだけど……

「大丈夫か？」

「オールオッケーですよ。グッジョブですよ。フェイト君」

「全然大丈夫じゃなさそうだな……」

ちよっ、限界……

「フェイト……」

「はいはい。」

膝枕……。でも……もう無理です……

奏谷 side

あ、俺か？

幽人早く起きねえかなあ。

あの時、ネルが打ったものは相当に強力なものだったらしく（ネル曰く、最強のものらしい。）

五日たったんだが、未だに目が覚めない。

加減しろよ……。

今幽人は……他の生徒たちからしたら、相当うらやましいポジションにいる。

要するに、リエとレイに挟まれてる……二人用の席で。

相当、狭そうだ。

好かれてるねえ、幽人は。

「早く着かねえかなあ。」

「後、一時間ぐらい？」

マジですか……ネルさん。

「ふあ？」

ん？幽人が目覚めたか……。

幽人 side

……ここどこだ。

「お目覚め？」

「ようやくだね」

「レイ……リエ……？」

て言うか、ここバスの中？

そうか……あの時眠らされて、無理やり任務に……。

「やっと目が覚めたか？ 幽人」

「菅谷！？」

「よっす、久しぶり。」

よりもよって、高二の警護かよ……

「何だよ、うれしくなさそうだな？」

「面倒なのは嫌いなんだ。」

「面倒って……ひどくね？」

菅谷が何か言ってるが、無視する。

んなことより、さっきから嫌な感じがするんだが……。

窓の外に目をやる。

が、レイがどアップになる。

「ちよっ、レイ、どけ。外が見えん。」

「何か見えるの？」

窓の外をよく見る。

「あれは……！！」

マズイっ！

「『リヒト・ベフォルゲン』！！」

ほぼ全力のリヒト・ベフォルゲンを放ち、バスを完全に覆う。

デカイ爆発音とともに車内で騒ぎが起こる。

何故だ……！ 何でもないこのバスを何故狙う……！

「何だ！どうした幽人！！」

「奏谷、オプキュリアスだ！！」

「はぁ！？何で！？」

「知るか！キヨ、バスは全部で何台だ！？」

「五台！ここは二号車だ！」

「フェイトとソフィアは五号車、レイ、リエは四号車、キヨ、奏谷は三号車、ネルはこのバスの屋根に上がって、砲撃の阻止及び砲台の破壊、俺は一号車……！！」

いきなり天井が斬られ、敵が入ってくる。
ちっ！もうかよ！

「このバスは」

「「邪魔なんだよ！！」」

俺、奏谷、フェイトの蹴りが炸裂する。

「がっは…！？」

なんか言おうとしたっぽいのが、消えた。

他のバスにも来てんのか？

……急がねえとな

「ほら、お前ら！行くぞ！ぼさっとすんな！」

俺は開いた穴から屋根に出て、一号車に向かった。

十六時 合宿 一日目の午前の様子……? (前書き)

作「久々に帰ってきました!」

幽「何してたんだお前? 前回あんな駄作を残してからほったらかしにしゃがって。」

作「まあ、色々あったんだよ。風邪引いたりとかな。」

奏「その程度で……?」

作「きつかったんだよ! あれは!」

幽「はいはい、分かった分かった。皆様、どうでもいい作品が再び投下されています。ご注意ください。」

作「ひどくね……げほっごほっ。」

奏「直ってないんかい!!」

幽「ま、こんな作者はほっというて、本編始まります。」

十六時 合宿 一日目の午前の様子……？

フエイトside

「あり？」

俺も屋根の上に乗ってみると、まだ幽人がいた。

「どうした？幽人。」

「いや、砲撃してきたやつがいないなあって思ってたな」

「……ほかのバスには異常がないな。」

「それもだ。あいつら何がしたかったのかねえ？」

確かに。

俺たちのバスにきたやつは何だったんだ？

制圧するなら、俺たちタイムトラベラーがいないバスを狙ったほうが良かっただろうに。

「おい、早く行けよ！」

下からキヨの声が聞こえる。

「作戦中止っぽいぞ、キヨ。……だよな、幽人」

「ま、敵さんがいないんじゃないや、作戦もくそもねえだろ。」

「というわけで、銃をしまおうかネルさん。」

すでにライフルを構え、銃口をこちらに向けているネルがおつかない。

てか、何で俺に向けてんの？日ごろの恨みは奏谷に向けてくれ。

「ええー！久々にぶっ放せるかと……。……よし、幽人
ー！」

「んあ？」

「逝ってこーい！」

呼ばれて、顔を出した幽人に容赦ない一撃を放つ。

「どうああああ！！？」

「ちっ。」

「死ぬだろうがあああああ！！」

「死ね！！」

「ふざけんな！！」

二人の言い争いが始まる。

日常茶飯事とはいえ、場所は考えてほしい。

見ると、残りのやつらはすでに席に戻って、楽しんでいる。

俺もあちらに戻るとしますかね。

二人を尻目に、おれはいそいそと席に戻った

……っ！か、ひとつ疑問なんだが、ここの生徒はどんな神経回路してんだ？

幽人 side

ようやくつきました！合宿所！

いやー、緑が豊かです！！

「いやー、テンションあがりますねえ。どうですか、奏谷さん。」

「少しは落ち着けよ……」

「ノリがわりいなあ。んで？キヨ、次の予定は……ってどこ行った？」

「キヨなら向こうだ。」

奏谷が指差した先に、女子に囲まれどうしたらいいか困っているキヨがいた。

「独り身でかっこいい男ってのは、大変だねえ。」

「お前が言うことか？ほら、お前の後ろにも……」

「おいおい、ギャグはよそうぜ。えーっと、会議室1か？行こうぜ……って、皆捕まってんのか。」

どうしてこう、俺らのチームの連中は異性に纏わりつかれるのかねえ。

いつの間にか奏谷もあっちに行っちゃうし。

しゃーねえ、俺一人で行きますか？

俺は、一人鼻歌歌いながら会議室1があるであろう方向目指して歩いていった。

ソフィア side

「や、やつと着いた……。」

ようやく発見した会議室。

集合時間三十分ぐらい前に、行動開始したのに、着いたのは集合時間から十五分遅れ……。

「おっせーぞ、常時遅刻魔。」

幽人の口から、刃物のように鋭い一言が飛び出す。

「ひっど！遅刻魔からワンランクアップしてるし……。」

「どうやったら治るんだ？それ。」

「あのね、キヨ。いつも言ってるけどさ、私は遅刻したくてしてる

んじゃないくて、道に迷っちゃうの!!」

「余計質が悪い。」

「ぐむう。ちょっとひどいと思うよ!幽人!!」

「ポケーっしてしてそうで、中身もしっかりしているリエを少しは見習え。」

突然魔力の放流がほとぼしり、幽人の姿が消えた。

生徒たちも啞然としている。

見ると、リエの手から、魔力の残光が見える。

「それ禁句だから、今後は気をつけてね、幽人。」

笑顔が怖いよ、リエ……

「げほっ、は、はい……。」

「それじゃ、タイムトラベラーからの注意事項でーす!」

恐怖に包まれた会議室で、リエの口から注意事項が読み上げられてるけど、

誰も聞こえてないんじゃないかな……

でも、何で禁句なの?

奏谷 side

さて、気を取り直していきますか。

生徒たちへの注意も終わり、昼食の時間になっている。

俺たちも一箇所に集まって、昼食中だ。

「で?これからどうすんだよ、幽人。」

俺がコロッケをほおぼりながら聞く

「今後の予定にもよるんだが……キヨ。」

「えーっと、散歩だな。」

「散歩お？」

ネルが怪訝な声を上げる。

確かになんかこう、合宿でわざわざやるようなこととは思えない。

「正式名称は散策。おれが勝手に読み替えただけだ。」

「何するの？」

一足早く食べ終えたりエによるぼけた質問。

こいつは、さっきの出来事から、

『あのボケ口調はボケキャラを作ろうとしてやっている』
という疑惑がかけられている。

……みんな、口には出さないがな。

「いや、だから、散歩みたいなものだって。」

「もういい、エンドレスに続きそうな気がするからそこまでな。」

幽人が打ち切る。

……なんでこいつは皆が食べている前で銃の整備をするんだ？

「何で銃の整備してんの？」

レイが不思議そうな顔で聞く。

俺のセリフを奪うなよ……

「いや、出来るときにしないと暇がなさそうだから。」

「でも、行儀悪いよ？」

「良いんだよ……っと、よし!できた!」

二丁の銃が組みあがる。

その二丁の拳銃を虚空に消し、立ち上がった。

「おし!そろそろ行くか!」

幽人が出口に向かうと、ほかのメンバーもぞろぞろ立ち上がっていった……って、

「ちよっ、俺まだ食べ終わってない……」

悲痛な声を上げてみたが、無視された。

周りを見ると、掃除をしているおばさんたちしかいない。

「はぁ……。」

急いで胃の中に食べ物を押し込んだ俺は、急いであいつらを追いかけることにした。

十六時 合宿 一日目の午前の様子……？（後書き）

作「えーといきなりなんですけど、しばらく全然更新できなくなります」

幽「おい、こんだけ開けといてか？」

作「しょうがねえだろ。ちなみに期間は一年ぐらいですか？」

レ「これはまた、長いなー。」

幽「理由は？」

作「えーと、ユーザページとかから察してください。」

幽「出来るかあー！！！」

レ「しょーがないよ、幽人。これがこの作品の作者だよ。」

幽「ちっ。」

作「そうそう。」

幽「レイ、俺が教えたあの技でやっちゃって。」

作「おい、それって今後に出す予定のあの技じゃ……」

レ「オツケー。いつくよー！『豪火絢爛』！！！」

作「ぎいやああああ！！あっつ！熱いって！ちよっ、あっつ！！！」

幽「というわけで、しばらく更新が滞るそうです。……そんな事言っておきながら、すぐに次のやつ出しそうだけだな。」

レ「今までも遅かったんだけどね。……読んでくださっている少ない方々、申し訳ありません！」

幽「それじゃー、また次の回で！」

レ「またねー！」

散策っ!! (前書き)

お久しぶりです……。

覚えている人は……いませんよね。

まあ、いいや。

今回時間がかなりないので、前書きはこの程度で……。
では、どうぞ。

散策っ！！

幽人
Side

「だっりい　い　い　い　い　い　い　い　い　い　い　い　い」

「うっさい！」

奏谷から、怒声が飛んでくる。

でも、だるいことに変わりはない。

時は五月、空は快晴、道は緩やかな斜面。確かに、散策にはぴったりの一日だろう。だけどな……。

「だつ」

「黙れ！」

今度はフェイトからの怒声。
まだ三十六回目じゃないか。
だるいって言ったのは。

「お前ら心狭いなあ。」

「……お前に言われたらおしまいだぜ。」

「奏谷よ、そんな事言っているのか？俺、一応リーダーなんだけど。」

「この自然の中を歩くということを楽しめんやつの気が知れん。」

俺の反論は一蹴された。

しかし、長い……。○

あと、一光年ぐらいは

「二光年もないよ、幽人」

「レイ……お前は読心術でも持ってるのか？」

「持っていないよ。予想しただけ。」

なんだこいつは……。

アイドル＋Time Traveler＋人の心を予想……ってか、これって読心術だよな？

こんだけ、てんこ盛りって……

あーでも、

「早く着けー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

奏谷
S i d e

というわけで、山頂です。

「いや、気持ちよかった。」

「何が？」

ネルが横から聞いてくる。

右腰に銃がぶら下がっているのがかなり気になる。

「とりあえず、その銃消しとこうか。」

「へい」

右手で銃を引っ張り出し、空高く上げると虚空へと消え去った。

「んで？何が気持ちよかったの？」

「そりゃー、あのマイナスイオンたっぷりの空間を歩けばそうなる

だろ？」

「……わかんない。」

「お前も幽人と同類か……。」

思いつきため息をつく。

なぜこの良さがわからんのだ。

「幽人と同類ってひどくない!？」

「あいつもお前も自然のよさが全くわかってない!!」

「それだけで同類って……」

「じゃあ、今から自然のよさについてみっちり教えてやるよ。」

「あ、いや、あの」

「いいな、まず自然の中に入ることでもいろんなことを感じる事ができる。」

たとえば、森の中を風が吹いていったでしょう。

そうすると、俺たち人間は爽快感というものを得ることができる!

その爽快感は古来より人間が受け継いできた感性だ。

遺伝子レベルで刻み込まれたそれが呼び覚まされるとき、

人間は『ああ、おれ、生きてる……』と感じることが出来るんだ。

その他にも、日本人は信号の緑を青色、と呼ぶだろ?

そこにはだなあ——————————」

ネル side

や、やっと終わった……

みっちり三十分。

まだ続きそうだったから

「うん!とってもよく分かった!!」

って言って、逃げちゃったよ……
あー、疲れた。
癒されるどころか、疲労感たっぷりじゃん。
たまーにああいった事があるのが、少し残念なんだよねー。
ま、もう慣れたけどね。
……ん？

「どうしたの、幽人。」

幽人がボーっと空を見上げている。
今も声をかけたけど反応がない。

「おい。」

反応なし。
うーん。

「レイ！ちょっとこっち来て！」
「うん？なに？」

男子に囲まれていたレイを救出するついでに、一緒に幽人を覚醒状態にもらう。

「……ほっといたらダメなの？」

「ほっといたら、永遠にあそこに立ち尽くすよ？」

「うっそだろ。」

「いや、嘘じゃないよ？」

だって、ひどいときは、冬の雪が降っている中、二週間は立ってたからね。」

「よし、起こしますか。」

レイもこの状況が分かってくれたところで……

「どうやって起こすかよね。」

「へ？ ないの？」

「その時は、全員で攻撃して覚醒させたんだけど……」
「けど？」

「半殺しにされてね……」

「うわーお……」

そう、どうやって起こすかが問題なんだよね。

下手な起こし方じゃ起きないし。

かといって、半殺しもいやだ。

うー、どうしたもんかねえ。

「じゃあ、こうすればいいんだよ！」

「へ？」

レイが幽人に近づいていく。

何する気……？

そう思ってたなら、耳元に口を近づけ、

「ふー」

「ぎゃひいっ!？」

……起きた!？

耳に息吹きかけただけで!？

つか、幽人、変な声あげすぎ!!

レイもそんな事しちゃバイでしょ!!

幽人の命が危なくなるよ!？

主に男子生徒によって!!

……………ま、まあ。

起きたからよしとするか、うん。

「起きた？幽人？」

「ネル？……ああ、またボーっとしてたのか。」

「何でボーっとしてたの？」

レイが聞くけど、この子、自分がやった重大性に……さすがに気づいてるか。

だって、顔赤いもん。

全く、恥ずかしいならやんなきゃ良いのに。

「いや、まあ、色々あってだな。」

そういう前置きをおいてから、幽人が話し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4069q/>

TimeTraveler

2011年10月8日16時50分発行